

平成30年度 アドバイザー派遣事業 実施レポート

境港市立第一中学校

1. 研究テーマ 確かな学力と豊かな心を育み、みんなと生きる生徒の育成
～かかわり合い学び合う主体的な活動を通して～
2. 指導助言者 学びの共同体研究会 スーパーバイザー 馬場 宏明 先生 (元東大阪市立金岡中学校長)
3. 期日・場所 平成30年11月20日(火) 境港市立第一中学校
4. 公開授業(9:55~11:45)および指導助言(11:55~12:55)

(1) 2年数学「図形の調べ方」

ジャンプ課題は問題が多かった。多くの課題を出すと、生徒の思考がばらばらになる。質の高い課題一つに絞り、みんなで考えさせるようにする。みんなで考えることで、個人の思考が深まる。生徒が問題に取り組んでいるときに困っていても、教師は安易に教えたりヒントを出したりしてはいけない。グループ学習は、相談しながら自分たちで解いて、力をつけていくためのものである。全体の場で生徒が発表したとき、説明が不十分だった場合、教師が突っ込みを入れる。「わからない人はいない?」「質問はない?」と全体に返すことも大切である。説明不足のままでは、多くの生徒が理解できず、学習内容が定着しないことになる。

(2) 1年理科「光の性質」

ICT を使った説明はわかりやすいが、記憶に残りにくいという側面がある。知識を定着させるためには、自分で書いて説明させるのがよい。光の屈折を予想させたとき、中心軸を書かせる必要があった。考えさせる根拠が必要である。実験結果が出たとき、説明を生徒にさせる。教師は黒板から離れたところで聞き、必要があれば質問をするなどコーディネーターに徹する。生徒の理解を促すとともに説明する力をつけていく。実験をするときは、手引きを作成し、その手引きを見ながら生徒が自分たちで実験できるようにする。教師は、最低限の注意だけする。このような学習が主体的な生徒を育てることになる。実験においては考察がジャンプ課題となる。

5. 研究授業(14:25~15:15)

2年音楽「ギターを演奏しよう」(授業デザインは別紙)

授業参観の視点……「学びの共同体」(協同学習)の理論・方法を取り入れ、かかわり合い学び合う主体的な活動を通して、「確かな学力と豊かな心を育み、みんなと生きる生徒の育成」をめざした学習活動の展開

①生徒が主体的に学び、学習(教科)のねらいを達成する(確かな学力を育む)ための「学ぶ値打ちのある課題」となっているか。

- ・「共有の課題」(基礎・基本、知識・理解、技能)
- ・「ジャンプ課題」(応用・発展、技能、思考・判断・表現力)

②個々の生徒の学びや、生徒同士のかかわり合い学び合い(班・全体)が成立していたか。

- ・「共有の課題」における班活動(個人作業の協同化…わからないときに聞く)
- ・「ジャンプ課題」における班活動(他者の意見を聞き、自分の考えを深め広げる)

6. 研究協議および指導助言(15:30~17:00)

(1)開会あいさつ (2)授業者の自評 (3)グループ討議 (4)指導助言

実技教科は、知識ではなく、体に伝えることが大切である。したがって「真似」が基本となり、モデルが必要である。今日の授業では、映像がモデルとなっていてよかった。生徒は模倣することで学ぶことができる。また、学習の手引きがあり、生徒はそれを見て自分たちで学ぶことができた。練習は、グループでやるのが効果的である。互いにアドバイスをすることができる。また、ペアやグループは男女混合がよい。実際に男女ペアや男女のグループになったときは、生徒たちも楽しそうであった。雰囲気明るく、笑顔が出る。グループ学習のときに気をつける点は、上下関係をつくらないということ。民主的な関係であることが大切である。グループ学習は人間力を育てる。コミュニケーション力や誰とでも学習できる関係を築ける力である。困難にぶつかったとき、「わからないから教えて」と言える人が自力で生きていける人である。わからない生徒に「わからない」と言わせること、言える空気をつくってやるのが大切である。教えてもらうことを待つ子にしない。「話し合い」は直感的考察(思いつき)、「学び合い」は科学的考察である。したがって、教科書などに根拠を求めるようにさせる。「考え、議論する」道徳にも「学びの共同体」の理論を生かしてほしい。価値判断をグループで議論させ、全体で共有する。そして再度グループで考え、価値判断させる。教師は結論を言わない。